

歴史的地域の实態と再生プロセスの検討

—鳥取の城下町の事例を中心として—

調査研究サブ・ディレクター 澤田 廉 路

はじめに —歴史文化の重要性—

木原啓吉は「歴史的環境—保存と再生—」(1982: 岩波新書)のまえがきの中で、「歴史的環境に対する人々の関心が高まったことは、環境の物的価値に加えて、環境の精神的あるいは文化的価値が重視されてきたことを意味する。」とし、さらに低成長経済の時代を迎えるとともに、あらためて、貨幣価値では測れず、それ故にまた住民生活にとって根源的な価値をもつものが重んじられるようになってきたとして、歴史的環境の重要性を指摘した。また、具体的に「たとえば、昔から村に伝わる一本の樹、海辺を渡る潮風、遠くに見える寺の屋根、歴史的町並みがつくり出す昔ながらの景観—こうした自然と歴史が一体となった環境は、それ自体、その価値を数量化しにくい、それがそこに存在することで、住民の心はやすらぎ、地域の文化もまた、それを基盤に育ってきた。こうした数量化を超えたものこそは、住民の精神的連帯のシンボルである。」¹と説明している。

西村幸夫は「すべての都市は過去からの連続の上に現在があり、未来がある。」²(2004都市保全計画)として、都市の将来を考える際の指針として都市の過去が重要であると指摘し、「都市において将来の世代が育っていくにあたって都市に蓄積されてきた先人たちの営為を知ることは不可欠である。」³(2004都市保全計画)として、歴史的都市の保全の重要性を強調している。

また、その歴史的環境が醸し出す景観、情景を好ましいとする人は多く、そのようなまちを訪れる人も多い。しかしながら、その地域の環境はその地域の住民のものでなくては

ならないし、地域の生活に犠牲を押しつけるものであってはならない。より、快適で住みごたえのある地域で、愛着や誇りがもてる地域として、まず歴史的環境を機能させる必要がある。

歴史的環境に内在する精神的な価値に創造的な発想力を加えて、新たな価値が付加できれば、見えにくかった歴史文化の重要性が具現化されることとなる。

I 調査研究の概要

1 研究の背景と目的

歴史的景観、自然景観など、地域固有の景観が見直され、まちなみの持つ歴史性、文化性が重要視されてきた。しかしながら、鳥取大震災、鳥取大火の二度にわたる大災害を運良く、まぬがれた鳥取の、城下、城下町を形成していた歴史的地域で建物が人の手によって壊され、駐車場にかわる例が最近目立つようになった。この地域の実態を把握するとともに、鳥取のまちが発祥した地域の歴史を掘り起こし、歴史の持つ重要性を認識しながら、どうすれば歴史的な地域を再生させることが出来るのか、平成15年度調査研究した倉吉打吹地区、鹿野地区のこれまでの活動を参考にしながら、問題点を明確にして、地域のアイデンティティの確立と地域自立の手法のプロセスを考察する。

2 研究の方法と位置付け

地域の地勢、歴史、風土は固有なもので、同じ地域は二つとないのであり、その地域ならではのアピール力のある個性の活かし方は千差万別である。しかし、どうすれば地域の個性を引き出し、地域を再生させられるのか。

地域独自の歴史文化といった資源を再評価し、活用して、新たな創造的な取り組みも加味してその役割を担うことができるのか。鳥取ならではの独自性の活かし方を模索するものである。

鳥取のまちの成り立ち等は既往文献で把握し、この地域の実態、住民意識については、アンケート調査を実施し、過去から現在まで続く生活空間の記憶は聞きとり調査の結果を分析する。

歴史的まちなみをどう活かしていくのかについては、まちづくり活動の異なるステージにある倉吉、鹿野との地域間の比較もしながら、歴史的地域の持つ優位性を発揮した地域の活性化施策の手法をどう導きだすのか、そのプロセスを検証する。

本稿のこうした方法は先進的な取り組みの事例の中から、内容よりむしろプロセスを検

証し、今後のまちづくり活動をどうすすめていくべきか研究したものである。

Ⅱ 歴史的な地域のめざすもの

1 地域の歴史とイメージ

昭和18年9月の鳥取大震災、昭和27年4月の鳥取大火の二度にわたる大災害で多くの人命、財産とともに歴史的遺産を失った。藩政時代からつづく城下町の建物のほとんどが地震、火災によって、壊れ、燃えて、歴史的なものは残っていないと、多くの人達は思い込んでしまった。しかし、鳥取藩が形成される当時からまちがあったとされる久松山下から南東に位置する栗谷、江崎、馬場町、上町、中町、大榎町など山の手の地域の多くの武家屋敷や神社仏閣は、被害があったものの倒壊や延焼を免れ、残ったものも多かったのである。また、多くの建物を失った若桜街道から

図1 鳥取大火消失区域図と山の手アンケート調査区域

(鳥取大火と気象概報 昭和27年4月 鳥取測候所⁴より加工)



西側、智頭街道、鹿野街道にかけての中心商店街も、江戸時代の商人町、職人町からの町割を残しており、城下町としてのまちの骨格はそのままなのである。(図1)

しかしながら、筆者自身も含め、多くの市民は二度の大災害によって鳥取には古いものは残っていないといったイメージでの消失が定着している。昭和27年大火後の焼野原を知らない世代まで鳥取には古いものは残っていないというイメージが引き継がれている。

しかし、数少なく残っていた歴史的建物が壊され、無惨な空き地が増え、良好な景観が失われて、はじめて、心に大きな穴のあいたような空虚感と一抹の寂寥感を感じる事例がおきて、ようやく、気づく人も、関心をもつ人も増えてきた。

2 歴史的地域の実態

鳥取藩政時代から藩との関係の深いこの歴史的地域で、特に最近空き家、空き地が目立つようになった。その実態を確認するため、この地域の人口・世帯数などを住民台帳等によって調べた。

調査時点を平成16年10月合併前の9月30日現在として、高齢化率は全市の18.8%に比べ、約10%高い28.6%である。逆に14歳以下の年少者は13.0%で全市の15.4%よりやや少ない。

後継者が都会に出て行ったまま帰って来ないなど、高齢者夫婦、単身高齢者のみの世帯が多く、その高齢者がなくなると空き家になり、その中には壊して駐車場になる場合が多い実態を裏付けている。

また、平成7年10月1日の住宅統計調査時点との比較で、世帯数の減少が3%なのに対し人口は10.2%も減少しており、高学歴社会で大都市の大学へいった子ども達は帰らず、残された高齢者が地域を支えているという構図が浮き上がり、前述の現象を裏付けている。

3 記憶と場所の力

筆者が鳥取大学地域学部の地域計画論の特

別講義をした際に、「鳥取に帰ったな～」と感じるのはどんな時か尋ねたことがある。鳥取出身の何人かの学生が「久松山が見えたとき」と答えた。

毎日目にし、時には登り、遊んだ久松山は個人の記憶としても重要なものだが、また同時に鳥取藩の居城としてまちのどこからでも見えるシンボルでもある。もともと、そのように、まちは設計され、参勤交代の街道であった智頭街道の正面からよく見え、鹿野街道からも見えやすいように少し道路の放線がふられていた。また、立川方面からも正面に見えるよう道路もつけられていた。(図2) 個人的な記憶だけでなく、鳥取市内の住民、近郷集落の住民を含めた地域の協同体としての社会的な記憶は「場所の力」である。藩主が位置を定めた上意下達の「場所の力」だけでなく、鳥取の地域住民の共通の帰属意識の中から生じる一種のアイデンティティ構築の要素としての力でもある。この城の据えられていた久松山下の地域固有の優位性は、この歴史的な背景とその記憶によるところの「場所の力」にあることを認識しておかなければならない。

4 歴史的優位性の活かしかた

この地域のもつ優位性は江戸時代から鳥取藩、鳥取県の政治の中心、また文教の中心地に隣接することにあつた。このことは、聞き取り調査により、この地域のある意味で歴史的なステータスの拠り所がそこにあることがわかる。校区内にある進学校へ子供を行かせるために移り住んでいた例もある。(江崎町80代女性聞き取り) 現在も県立図書館、県民文化会館にも近く文教地区といえる。また、県庁、市役所、赤十字病院にも近く利便なところといえる。しかしながら、その歴史が持つ優位性や「場所の力」を活用する事例は少ない。さらに、以前は2、3あったスーパーがなくなり、日用品の購入に不便をきたしている。

図2 鳥取城と街道からの VISTA (眺望)

(図説城下町都市より⁵⁾)

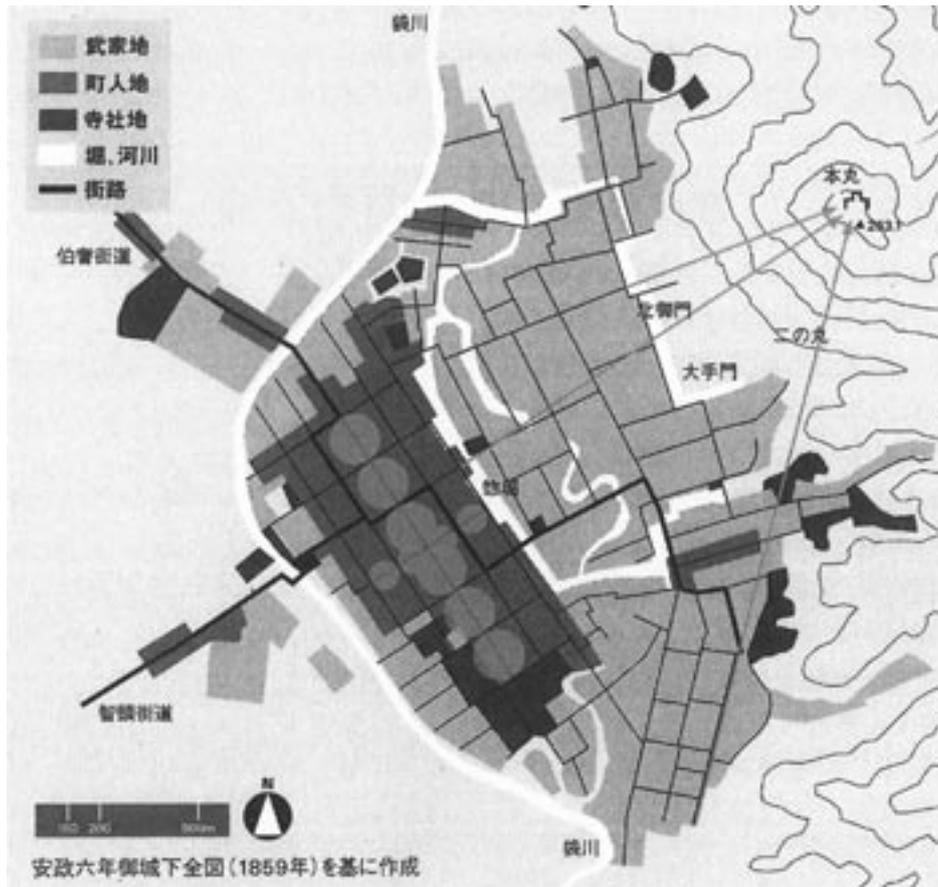
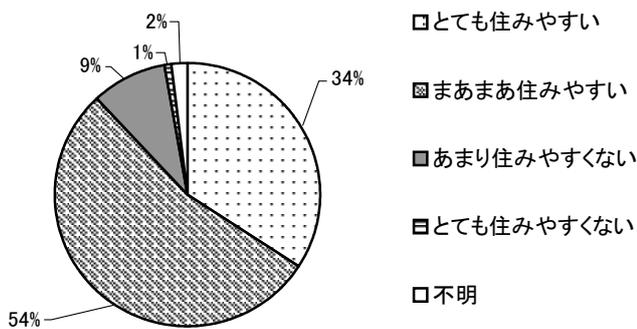


図3 地域の住みやすさ



山の手地区の住民は、住まいは快適（とても住みやすい34%、まあまあ住みやすい54%）（図3）としながらもスーパー、雑貨店がないことに不満を71.1%（複数回答）の人がもっている。（図4）久松山等の自然景観・自然環境をこの地区の好きなどころとして81%（複数回答）の多くの人があげ、居住地の町並み・家並み19%（合計複数回答）より断然多い。なお、歴史的な町のもっている

ステイタスが好きだと云う人も8.1%（複数回答）あった。（図5）

朝晩、あるいは土曜日、日曜日、久松山や樗谿など山の手この周辺の散策を楽しむ人も少なくない。この散策ルートや歴史が育んできた地域の風情を顕在化させて、地域住民のニーズも取り入れた手だての実施が今後期待される。

Ⅲ 鳥取市山の手地区の事例について

1 地区の実態と今後の方向

この地域に住む人達はスーパー等の利便施設がないことに不満を持ちつつも9割もの人々が住みやすいと思い、久松山等の自然景観を好んでいる。また、自由記入欄に「このような調査をもっと早くして、風情のある建物をなんとかして欲しかった」「10年遅い、手遅れだ」といった記述もあったが、武家屋

図4 住まい周辺の不満

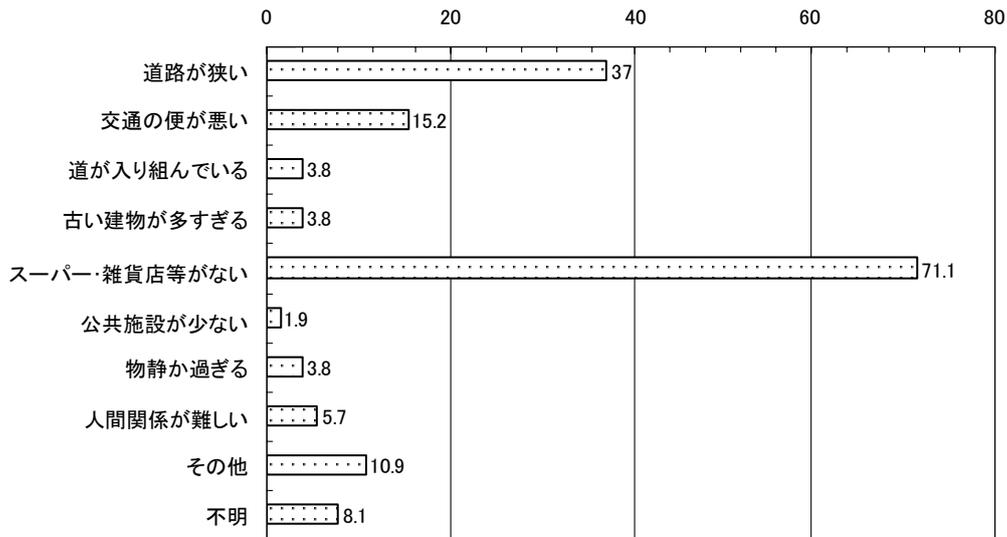
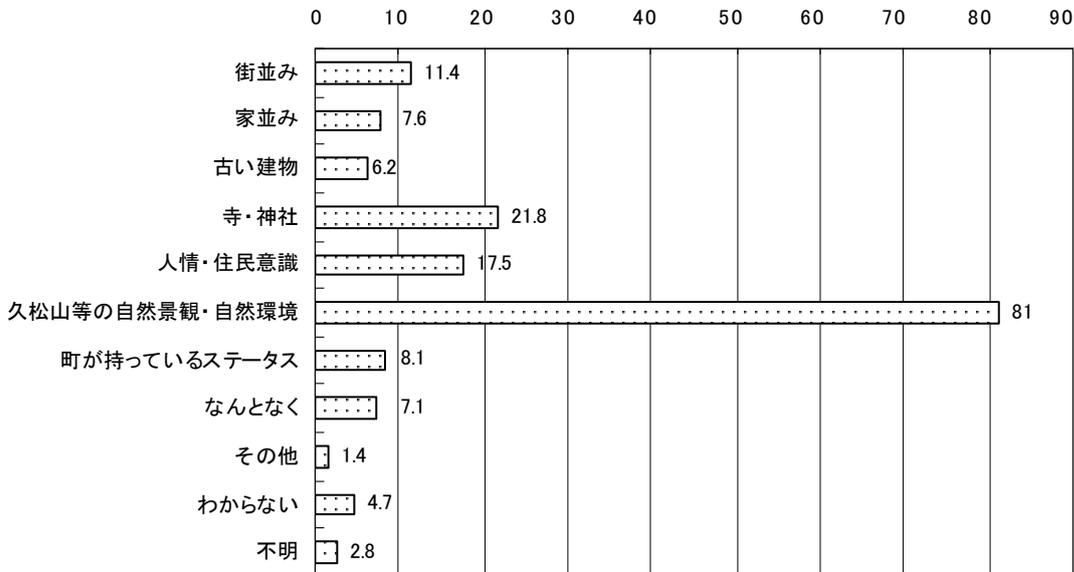


図5 住まい周辺の好きなもの



敷やまちなみに対する想いも高い。古いものは壊せばいいといった意見は3%にも満たなく、約8割が古い建物、まちなみなどを工夫して残すべきとしている。ただその内の半数は近代化する部分も必要なので調査が必要としている。ただ現在行われている建物や街並みの保存運動に対しては保存しなくて良いとする意見も6%あった。(図6)

城下町のイメージは、武家屋敷や門などの建物(約7割:複数回答)と城や石垣(約6割:複数回答)といったはっきり目に見えるものに多くの人はイメージを持つ傾向がある。

歴史的な古い町並みの持つ地域のよさと高齢化が進んでいる地域の特性と勘案しつつ、

図6 古い建物・街並み保存の意向

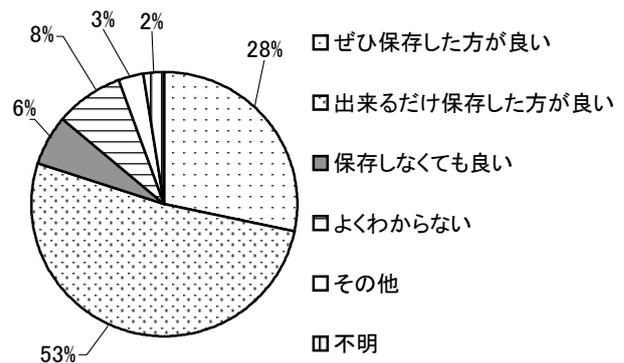
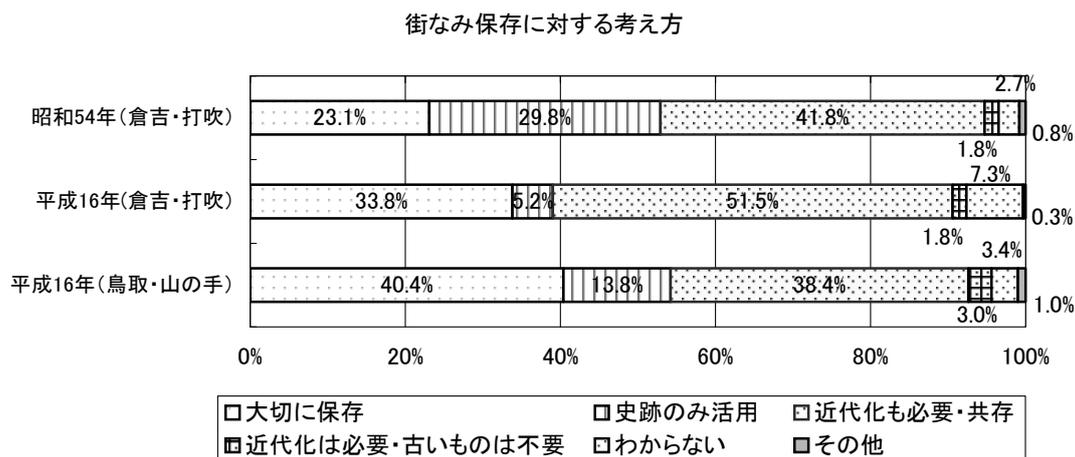


図7 街なみ文化財保存に対する考え方



利便施設の不足など地域の不便さを解消して、さらに快適で住み良い地域の再生を図ることが求められる。

歴史的な商家のまちなみ、玉川沿い白壁土蔵群をもつ倉吉の打吹地区で、伝統的建造物群保存地区の事前調査の一環で、昭和54年7月に住民の街なみ保存に関する意識調査⁶を実施しており、同じ質問項目で、平成16年11月、倉吉市打吹地区、鳥取市山の手地区で実施した。25年経過しているが倉吉では同じ地区で調査をしたが、神社仏閣など史跡だけ残せばいいとしていた考えが、大きく変わり、普通の家でも歴史を重ねてきたものを大切にしようとする考えが23.1%から33.8%に増えている。(図7) 昭和54年の調査時点ではまだ文化財保護法が改正されてから間が無く、歴史的まちなみの重要さについては、専門家の間だけで、広く一般にはまだ理解されていなかった。昭和60年代になり、地域固有の特徴を活かしたまちづくりが全国的に展開されるようになって、ようやく、地域独自のまちなみ景観や伝統文化にも焦点があたる機会が増えてきた。

また、最近では古い景観をいかしながら、快適に住むことができるさまざまな工夫もされ、古い民家の再生はむしろブームになり、近代的なものとの調和をはかりながら、古いものの持つ良さをいかした歴史的な景観を

大切にしていこうとする傾向があらわれた。また、鳥取市でも史跡に限らず「古いものを大切に保存したい」数値が高いのは、道路拡幅によって、古い民家が壊されたり、知らない間に由緒ある住宅が駐車場になった現実を目のあたりにした住民もアンケート回答者に多く、歴史的なまちなみ景観を大切にしようという保存運動が出てきた影響があると考えられる。

2 アンケート調査地域の概要

この地域は鳥取では最初にまちが形成された地域で、鳥取藩が32万石の町に拡大するとき既にあった地域である。町人の城下筆頭の町、江崎町の他は武家屋敷地が多い。山裾には藩主や藩主夫人の菩提寺や祈禱所となった藩祿の神社仏閣が多く、上町には東照宮を祀る樗谿神社があるなど歴史的な地域である。久松山系の麓南東に位置する山の手「上町、中町、大榎町、馬場町、栗谷町、江崎町」の6町内に絞って、アンケート調査を平成16年10月～11月、町内会長による直接配布、直接回収による無記名筆記で実施した。配布件数は647件で、回収率32.6%の211件の有効回答であった。

3 住民意識調査結果

「鳥取などで埋もれず、東京へ行き偉くなって、日本を動かし世界を動かす、立派な人になれ」と教育されたこの地区の子供は多い。

子供達はその言葉どおり、一生懸命勉学に励み、東京の大学に行き、霞ヶ関の中央官僚や、丸の内の大企業の幹部、大学教授となって、鳥取の地に帰ってこなくなった。その現実が、この山の手の地区にあった。本当にそれでよかったのだろうか。最近2件の孤独死があった(80代男性談)。高齢単身者のみ、高齢者夫婦の世帯も多く、山の手地域の高齢化率は28.6%で鳥取市全体より10%高い。(H16.9末) アンケートの回答者の4割が70歳以上という結果もそのことをものごとがたっている。

ところで、江戸時代から先祖がずっと住んでいた世帯はそう多くはない。(80代女性談)昔を知る古老の聞き取りで、山の手のこの地域で世帯の入れ替えがかなりあったことがうかがえる。しかし、最近はなぜそのような入れ替えがないのか、よく考えて見る必要がある。地域に人が住まなければ、地域は成り立たない。

土地・家屋の賃貸、売買の意向については、アンケート調査では本音が出てこないといった意見もあって、実施しなかったが、何人かに聞き取り調査をし、次ぎのような意見を聞き取った。

- お年寄りの一人暮らしが子どもの家に住むようになる(施設に入る)、死亡する。
- 空き家を壊すにも、お金がかかるために、空き家を放置する。
- 税金制度に問題がある。税金が多くかかるために、売らない・相続しない。
(相続税、不動産取得税など)
- 家主が修理費を負担するために、借家が少ない。他人に家を貸したくない。
(貸そうとすれば、それなりの修繕費がかかる、それなら壊して駐車場がいい)

この地域を住みにくいと思っている人は少なく、久松山の自然景観、歴史的な景観の中に佇んでいることに愛着や誇りを持つ人が多

い。予想された結果ではあるが、このことは、良きに付け、悪しきにつけ地域の有り様に影響し、高齢者の多い地域性とも相まって問題点と今後の方向性が浮き上がってきた。

4 地域再生のプロセス

地域住民は地域にたいする誇りや愛着を持ちつつも、もう価値あるものはない。こんな古い建物を残してどうする。と、いった意見もあったが、歴史的なまちなみ保存の大切さについて認識をする人達は増えてきた。これは、専門家が評価し説明する機会をつくるとともに、このようなアンケート調査が自らの地域を考える機会となっている。

倉吉では、昭和50年代から何度となく地域の建物、景観に関する調査を行い、「倉吉は調査ばかりして、何に役立つのか」といった声を聞いたことが幾度かあったがその積み重ねはボディーブローのように徐々にじっくりと効き、まちなみ整備の事業にも積極的に係わるようになる。そして、玉川沿いの白壁土蔵群を地域の誇りに思う人も多く、土蔵のある東仲町ではさらにまちをきれいにしたくなったとする意見が83.3%⁷もあった。

このように、自らの地域を良く知り、認識することから始めなければならない。地域の実態を知る調査は調査するほうだけでなく、調査される側にとっても、自らの地域を考え、良く知るきっかけでもある。京都の町屋の8000軒の調査を実施した鳥取環境大学の東樋口護教授は調査の中で聞き取りをしながら、コミュニケーションすることの重要性を指摘する。調査する側も調査される側も、調査の過程のコミュニケーションによって両方がかわっていく。そのことによってまちづくりが進展すると、今まで調査らしい調査が実施されなかった鳥取市の山の手地区の調査について、コメントをした。倉吉で調査を始めた頃、あるいは鹿野でまちなみ整備をはじめようとした頃に現在の鳥取市の山の手地域はあるのかもしれない。社会的な制度的問題は少しは解

消されてはいるが、通らなければならない一つの再生プロセスはやはり踏まなければならないだろう。

IV 歴史的地域の再生プロセスについて

1 景観を壊してきた公共事業

「日本は『自然を愛でる心』に献身する国でこんなことは起こり得るはずがない」と皮肉たっぷりに親日家のアメリカ人学者アレックス・カーは「犬と鬼 知られざる日本の肖像」の中で日本の現状を指摘する。「国中どこも土地の改造が進んでいる。幅1メートルほどの小川が流れていたところに、何十メートルもの幅でコンクリートを敷きつめ、もとの川はU字型水路に変貌する。林道を造るのに、山腹全体を爆破し・・・」⁸ 筆者は国土交通省が既に河川改修にコンクリートの三面貼りを止め、石積み等の多自然型の改修工事にかわってきていることを承知している。しかしながら、カーはさらに「年間に敷設されるコンクリートの量は、アメリカ全土に敷設される量より多い。1994年の日本のコンクリート生産量は合計9160万トンで、アメリカは7790万トンだった。面積あたりで比較すると、日本のコンクリート使用量はアメリカの約30倍になる。」⁹と、データを突きつけ、無機質で味もそっけもないコンクリート漬けの景観を嘆き、日本経済の失速理由もその中に潜んでいるとまで云う。

しかしながら、日本でもようやく自然景観の破壊の現実を経て、自らのまわりの景観・風景の大切さに気づく人が増えた。

また、自然景観だけでなく、自分達の記憶がつまった昭和初期の近代建築の解体に対して、ストップをかけ、解体新築を推進する町長と住民との対立が滋賀県豊郷町で平成13年頃から表面化し、リコール運動が起きた。先人達の教育への思いが表象されている地域の景観でもある豊郷小学校を児童の父兄、卒業

生が守ろうとした取り組みは大きなニュースとなった。

豊郷小学校だけに限らず、6年間学んだこの小学校の校舎も多くの人にとっては思い出のつまった懐かしいものにちがいない。しかしながら、古くなったものは、汚く、暗く、不便といった意味でとらえられがちで、新しい校舎を建てて環境を整備するのに多くは賛同し反対などするものはいなかった。これが、普通の日本の現実である。また一方、一般の住宅においては古いままであるのは貧しさのあらわれとの認識があり、たとえば藁葺き屋根もお金をためて瓦葺きにしようとか、家を新しくするのを楽しみにがんばって働いてきたと、倉吉と鹿野の古老は私に語った。

この豊郷小学校では雨漏りがあったり、耐震構造上に補強が必要だという町長側の理由で、結局は、平成15年に新校舎が完成された。(ただし、旧小学校もそのまま、公判中)

この豊郷小学校においては、多くの専門家たちが昭和初期の近代建築としての価値を訴え、日本建築学会も滋賀県も重要建築物として認定したが、その努力は満されていない。地域外の専門家の協力も必要だが、結局、地域住民に愛され、地域に馴染んだ景観となっているのが大きなポイントになる。そのものがもつ景観に価値があれば、傷んだところは直せば良いし、便利な機器があれば備え付ければ良い。また、新しいものが全て悪いのではなく、地域に愛され馴染むものになり得るかをよく考えなければならない。そうやってよく考えられた建物や景観を持つ地域は、美しさと風格を持ち、資産価値を高めることができ、そのような景観はやがてその地域の風景として多くの人に愛でられるものとなる。これが、まちなみ整備をすすめる大きな目標の一つである。

2 伝統的建造物群保存地区と街なみ環境整備事業

歴史的な建物の保存はもともと国民国家

の栄光の歴史を伝えるものとして、明治30（1897）年「古社寺保存法」が制定され、さらに昭和4（1929）年「国宝保存法」によって城郭の保存が加わったが、国家の栄光を保存し伝えるといった色彩の強いものであった。広く国民の共有財産として、様々な歴史的なものを対象にして公開や文化的活用を謳った「文化財保護法」が昭和25（1950）年に制定されたが「文化財に指定されると、釘一本打てなくなる」といった変に曲解された噂で、文化財指定を辞退する例や急いで取り壊す例まであった。昭和50（1975）年、全国的な町並み保存運動などを受けて、文化財保護法が改正され一般住民の住宅や倉庫など「広い周囲の環境と一体をなして歴史的風致を形成している伝統的建造物群」が文化財の種別に加えられた。

鳥取県では平成10（1998）年12月倉吉市の打吹玉川地区が全国51番目に、調査結果が出てから19年経て重要伝統的建造物群保存地区に選定された。調査時点ではまだ外部の専門家や郷土史家など一部の人の関心しかなかった。しかし、これらの調査が契機となり地域住民の関心も少しずつ高まり、昭和60年（1985）以降、地域のまちづくり団体の意識も変わってきた。平成4年には、まちづくり会社設立の研究会などが出来て、平成9年にはその成果をもとに打吹地区の玉川沿いの未使用の倉庫を改修した株式会社赤瓦が設置された。

倉吉の歴史的まちなみを活かした活動が軌道に乗りだした平成4年頃から、鹿野町では約400年の伝統を誇る鹿野の城下町を練り歩く鹿野祭りに似合うまちなみ整備を行おうとの声が大きくなり、平成6年には役場内にプロジェクトチームをつくり、各町内にもまちなみ整備推進委員会を立ち上げた。平成7年に街なみ整備基本方針を策定し、平成8年より「祭りに似合う街」を合い言葉に住民主導のまちづくり活動が展開され始めた。空き家

を有効利用した拠点整備が平成14年度、15年度設置されるなどまちなみの環境が整い、この成果をとっても良くなった55%、少し良くなった33%と約9割もの住民が平成16年12月～17年1月の調査で高い評価をしている。ただ、前より誇り・愛着が持てるようになったのは57%にとどまっている。

3 まちづくり条例と景観法

4.1の景観を壊してきた公共事業で記述したように国土交通省は事業実施の中で、ある意味景観を壊してきたことに襟を正して、わが国の美しい自然との調和を図りつつ整備し、次ぎの世代に引き継ぐという理念の下、行政の方向を美しい国づくりに向けていくことを「美しい国づくり政策大綱」にまとめ、平成15（2003）年7月に公表した。これは、地域の歴史や文化、風土にねざした美しいまちづくり、良好な景観づくりが各地で取り組まれ、地方公共団体においてまちづくり条例、景観条例の制定がなされてきたが、あくまで自主条例で法的根拠がなく、いざというときの強制力がなかった。平成16（2004）年12月の「景観法」の制定でようやく法的根拠ができた。

また、3の住民意識調査（P38）の中の問題点としてあげた税制上の問題も支援できるような仕組みが備えられた。

さて、この景観法の基本理念として「良好な景観は、地域の自然、歴史、文化等と人々の生活、経済活動との調和により形成されるものであることにかんがみ、適正な制限の下にこれらが調和した土地利用がなされること等を通じて、その整備及び保全が図られなければならない。」また「良好な景観は、地域の固有の特性と密着に関連するものであることにかんがみ、地域住民の意向を踏まえ、それぞれの地域の個性及び特色の伸長に資するよう、その多様な形成が図られなければならない。」¹⁰等、まず、地域の自然、歴史、文化などを良く理解されることが前提となってい

る。そして、その上で地域住民、地方公共団体、事業者が一体的になって良好な景観形成にむけて取り組みをするよう義務づけている。この精神こそ歴史的地域が再生にむけて行わなければならないプロセスでもある。

おわりに

歴史的地域の景観はその地域の山や川、或いは他地域とのつながりといった地勢的な立地や自然、幕藩体制の参勤交代、明治維新以降の富国強兵、殖産興業政策など歴史的、政治的、経済的、社会的な背景をもった地域の文化、生活の積み重ねの総体としてできあがったものといえる。

長い歳月をかけて、その地域に馴染んできた習慣や伝統が形となって、もともとあった自然に溶け込んで調和してできたものが地域固有の景観であり、そこには過去からの本物の情報が封じ込められている。日頃あたりまえだと思っている生活空間に価値を見だし、封じ込められている情報を引き出し、地域再生への足掛かりにするのは簡単なことではないかもしれない。

しかし、物事の原点はそこにあるのではなからうか。鳥取のことを良くしようと思えば、まず鳥取のことをよく知らねばならない。その地域を良くしようと思えば、まず、その地域をよく調べて知らねばならないだろう。どっぷり地域に浸かっていれば、自分の顔は自分で見られないように、地域のことが見えないことがあるかも知れない。地域を映す鏡を用意するなり第三者の冷静な目で見てもらう必要があるかも知れない。しかし結局それは、それぞれの地域の歴史や地域の特質をしっかりと把握し地域自身のアイデンティティに目覚めることにほかならないのである。

【謝辞】

アンケート調査、ききとり調査に応じていただいた山の手地区の皆様、調査集計に協力しても

らった(株)情報サービス鳥取の山中社長、渡辺マネージャー、コメントをいただいた鳥取環境大学東樋口護教授他関係各位に厚くお礼申し上げます。

- ¹ 木原啓吉1982「歴史的環境—保存と再生—」岩波書店 まえがき iii
- ² 西村幸夫2004「都市保全計画」東京大学出版会 p 3
- ³ 西村幸夫2004「都市保全計画」東京大学出版会 p 14
- ⁴ 鳥取測候所1952「鳥取大火と氣象概報」添付別葉 鳥取県立図書館の資料編
- ⁵ 佐藤 滋2002「図説城下町」鹿島出版会 p 150
- ⁶ 倉吉市教育委員会1980「倉吉商家町並保存対策調査報告書」p 66-69
- ⁷ 澤田廉路2004「歴史的まちなみの再生」とっとり政策総合研究センター p 36
- ⁸ アレックス・カー 2002「犬と鬼」講談社 p52
- ⁹ アレックス・カー 2002「犬と鬼」講談社 p52 生産量と使用量では指標が異なるが原文のままとした。
- ¹⁰ 景観まちづくり研究会2004「景観法を活かす」学芸出版社 p 12

<参考文献>

- 芦村登志雄、鷲見貞雄 1988.『郷土シリーズ34巻鳥取の災害—大地震・大災害—』鳥取市社会教育事業団
- アレックス・カー 2002『犬と鬼』講談社
- 木原啓吉1982『歴史的環境—保存と再生—』岩波新書 まえがき iii
- 景観まちづくり研究会2004『景観法を活かす』学芸出版社
- 佐藤 滋『図説城下町』1998. 鹿島出版会
- ドロレス・ハイデン著2004『場所の力』学芸出版社
- 澤田廉路2004『歴史的まちなみの再生』とっとり政策総合研究センター
- 清水真一、蓑田ひろ子、三船康道、大和智 1999『歴史ある建物の活かし方』学芸出版社
- 鳥取県立博物館1984『久松山鳥取城』鳥取県立博物館
- 鳥取測候所1954『鳥取大火と氣象概報』鳥取県立図書館の資料編
- 鳴海邦碩1988『景観からのまちづくり』学芸出版社
- 西村幸夫2004『都市保全計画』東京大学出版会
- 日本建築学会 2005 総合論文誌第3号『環境デザインのフロンティア』日本建築学会
- 文化庁2000『歴史的集落・町並みの保存』第一法規

<参照ホームページ>

- 豊郷小学校の歴史と未来を考える会ホームページ：
<http://homepage2.nifty.com/> (2005/02/28豊郷小学校問題これまでの経緯)